

氏名・（本籍地）	高瀬 顕 功（静岡県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 102 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 16 日
学 位 論 文 題 目	現代宗教と社会参加—FBO 概念の再検討—
論 文 審 査 委 員	主査 弓 山 達 也 副査 星 野 英 紀 副査 島 蘭 進

高瀬顕功 氏 学位請求論文審査報告書

「現代宗教と社会参加—FBO 概念の再検討—」

論文の内容の要旨

本論文の目的は、現代社会と社会参加を分析する枠組みを提示し、宗教の社会活動の様相をとらえることにある。より具体的に言えば、社会福祉の領域にかかわる宗教組織および宗教系組織の組織構造を、類型モデルによって明らかにすることである。

そのために序章では先行研究をふまえたうえで、本論文の核となる類型モデルを提示。このモデルは、組織の人的資源の独立性、経済的資源の独立性を変数軸とした 4 象限マトリックスによって構成され、宗教組織と活動団体の親密性／独立性を測るものである。ここから本論文ではこの類型モデルを「独立性モデル」と呼び、以降の章ではそのモデルを援用した活動事例の分析が試みられている。なお本論文では、この類型モデルのうち、人的・経済的資源の独立性が高いものを「自主自立型」、経済的資源は独立性が高いが、人的資源の独立性が低いものを「人員動員型」、人的資源の独立性は高いが、経済的資源の独立性が低いものを「資金依存型」、人的・経済的資源のどちらも独立性が低いものを「組織内在型」と名付けている。

第1章では、米国の4つのFBOの事例を取りあげている。ここではまず、米国での宗教の社会福祉領域における歴史的背景を確認するとともに、ペンシルベニア州フィラデルフィア市でホームレス支援を展開する団体を対象に、その組織が分析される。これらはいずれもキリスト教系の団体であるが、活動方法は大きく異なる。それらの組織を独立性モデルによって比較することで、各団体の特徴を洗い出している。

第2章では、日本の2つのFBOの事例を扱っている。最初に、明治中期以降、仏教教団が積極的に社会問題にかかわっていく過程に触れ、その後、東京・浅草周辺でホームレス支援活動をするキリスト教系団体と仏教系団体を取りあげ、分析している。第1章と同様に、独立性モデルを用いてこれらの団体を分析することで、ここでは活動団体の性格を明らかにするだけでなく、組織変容の動態も解明されている。

第3章では、災害時の宗教者による救援活動に焦点があてられ、独立性モデルの援用可能性が検討され、福島県にある伝統仏教教団の下部組織を対象に、東日本大震災以後の活動の変遷とそれにとまなう人的、経済的資源の移り変わりを描き出している。調査対象となった団体は炊き出し、がれき撤去、仮設住宅訪問、子ども向け保養プロジェクトの4つのプログラムを実施している。それぞれ人的資源、経済的資源の供給源に変化はあるものの、ほぼ教団内資源を活用する組織内在型に留まり、独立性モデルでの分析には限界があることも示されている。

終章では、これまで取り上げた事例を踏まえ、独立性モデルの援用可能性について論じられている。そこでは定量的研究だけでなく定性的研究にも援用可能であること、文化的制約に縛られずに活動団体を分析できることなどの特徴が提示されている。このように、本論文では序章で提示した独立性モデルを、各章で取り上げた事例の分析に一貫して援用し、検討することで、当該モデルがもつ有用性を示す内容となっている。

審査結果の要旨

本論文の意義は、近年、研究の進むFBOを分析するための枠組みである独立性モデルを構築し、前述の通り、自主自立、人員動員、組織内在、資金

依存の FBO の 4 類型を得たことにある。先行研究では宗教活動への関与の度合いや布教・伝道への傾斜を軸として分類が行われていたが、本論文では、こうした宗教性から離れて、人的資源・経済的資源という比較的可視化しやすい尺度によって、時間的にも地域的にも異なる FBO を同じ 4 象限マトリックス内で比較しうることに成功している。また特定の FBO の変容といった時間的な変遷も追うことも可能となっている。

こうした組織分析の意義は大きく、継続的な調査によって、さまざまな FBO をこのモデル内に布置することによって、本論文のテーマである宗教教団の社会参加の全体的なトレンドや時代の推移による各類型のグラデーションが明らかになるに違いない。また現段階ではそうした分析は十分にされていないものの、本モデルを定性的調査と組み合わせることによって FBO の組織性と志向性の相関関係がとらえられ、問題発見の端緒となることが十分に予想される。

また本論文ではホームレス支援を行う米国 4 団体と日本 2 団体の FBO が調査対象の中心となっているが、FBO の比較はもちろんのこと、ここから日米の宗教や福祉に関わる文化的・歴史的な比較が可能になるものと思われる。今後の優れた研究に大成する萌芽的な研究の試みとしても本論文は評価されよう。ただそのために本研究に求められる課題を以下に記しておきたい。

第一に本論文で示された独立性モデルの有効性が今一度検討されよう。宗教教団の社会参加を問うにあたって、あえて宗教性を排したモデルを作ることだけで、筆者が意図するような成果が得られるのか疑問である。宗教性に関する尺度はさまざまに作成されており、可視化するために退けたという理由だけでは不十分であろう。本論文は問題発見型の研究であり、このモデルをどう使い研究を行うか今後の課題である。

第二に対象設定の問題である。宗教の社会参加の領域のうち本研究はなぜホームレス支援に焦点を絞ったのか、またその中でも、規模も背景も異なる当該団体の代表性とともにも明確化される必要があろう。もちろん日米宗教教団における貧民救済の歴史と役割は重要であり（例えば感化救済事業や社会改良運動）、こうした歴史性を踏まえた上での対象設定や分析が求められる。また対象としている FBO について、日米で筆者の関わりの度合いや記述の

厚みも異なり、米国における経年的調査も必要になってくるに違いない。

第三に日米の文化的背景に関する検討が課題となろう。本論文では文化的差異や宗派／教派の差異があっても、それらを越えて同じ比較の土俵に乗せることを第一義に追求したため、かかる背景に関する考察が十分ではない。日米の福祉制度、公共の場における宗教教団の役割・位置、宗教教団への社会的期待、前述のような福祉への関わりなどが検討の俎上に乗せられよう。

これら検討すべきことの多くは、独立性モデルに事例を落とし込み、その上で今後どう分析していくかという課題群に属する。これをなしうることによって、これまでの宗教の社会参加の研究に新しい可能性を示すことができ、また日米の宗教教団の社会に置かれている位置やそこでの宗教性の解明につながるに違いない。以上のように本論文は解決すべき課題を有しているものの、それはそのまま今後の筆者の研究、ならびに斯界の中心的研究に直結するものであり、口述試問において筆者自身もその展望を十分に説明し得た。以上のことから本論文で示された知見によって当該研究の可能性は大きく伐り拓かれるといっても過言ではない。

これら本論文の内容と口述試問の結果を踏まえ、主査・副査とも本論文が博士（文学）の学位授与にふさわしいものであると判定する。